

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：34405

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370097

研究課題名(和文)セルフポートレートと演劇性：クロード・カーンと前衛劇の交差

研究課題名(英文)Self-portrait and Theatricality: Claude Cahun's Encounter with the Avant-garde Theatre

研究代表者

長野 順子 (NAGANO, Junko)

大阪芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：20172546

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：シュルレアリストの女性写真家・作家として近年再発見されたクロード・カーン(本名リュシー・シュオップ、1894-1954)は、主に異性装や鏡を用いた特異なセルフポートレートによって知られているが、彼女の領域横断的活動を、これまであまり注目されなかった「演劇性」という観点から捉え直すことが、本研究の目的であった。

本研究期間を通して、カーンが1920年代に関与した前衛劇における様式化された身ぶりや仮面・人形という意匠に注目し、それと彼女のセルフポートレート及び著作における演出化との関係から、彼女の言う「肉と言葉」の仮面による「永続的なカーニヴァル」の独自の意味を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Since re-discovered in the 1980s, Claude Cahun (the pseudonym of Lucy Schwob, 1894-1954) has been recognized as one of the surrealist photographers. Her reputation is mainly based on her striking self-portraits, which are characterized by travesty or cross-dressing and her distorted or mirror images as well. We intended to reconsider Cahun's multiple works in the aspect of theatricality, focusing on her short-term engagement in Parisian avant-garde theatres. Through this research-program, we tried to bring to light Cahun's activities on the stage and make clear the relationship between the old mask or marionette applied to the avant-garde theatre and the manner of staging or mis-en-scène in her self-portraits and writings. Within her 'charnel et verbal' masquerade, one can see an unique form of 'le Carnaval perpetuel'.

研究分野：美学芸術学

キーワード：セルフポートレート シュルレアリスム フランス前衛劇 仮面/人形 カーニヴァル空間

1. 研究開始当初の背景

16-18 世紀、芸術家の自意識の高まりとともに諸類型(列席・変装・研究・独立型)で描かれるようになった自画像は、19-20 世紀には自我認識や自己探究の場へと深化した。それらを通して自画像は、主体の同一性や鏡像的透明性を確保するよりもむしろ自我の分裂や眼差しの交錯における逆説性を顕わにしてきた。とくに現代の女性アーティストの多様な媒体(とくに写真)によるセルフポートレートは、女性イメージのステレオタイプ化に抗するラディカルな身体表象が特徴的である。その初期の代表者クロード・カーンの変幻自在のシュルレアリスム的な自己表象には、現代アートの諸ジャンルにおける主客の流動化や、吐き気やグロテスクにまでいたる美的(感性的)変革を示唆するような諸要素を認めることができる。

欧米でのいくつかの企画展に続き 2011 年にパリのジュ・ド・ポーム国立美術館で大回顧展が行われたクロード・カーンについて、申請者は既にそのセルフポートレートの時系列と技法、シュルレアリスムとの影響関係を精査し、彼女が晩年を過ごした英国領ジャージー島のヘリテージ・トラスト・アーカイヴで晩年の反ゲジュタポ運動関連の資料調査等を行ってきた。また先駆者カーンに継ぐ女性アーティストの活動を 1930-40 年代、60-70,80 年代、90 年代-21 世紀に区分して、その多重的・分裂的な「自我」像や身体表象について検討した。研究成果は複数の口頭発表と論文により公表した。

その過程においてナント大学の視覚文化論パトリス・アラン助教授との研究打合せ中に、1920 年代の前衛劇へのカーンの参画に関する精査の必要性を確認し、同助教授とフランス国立図書館でエゾテリック劇場関連の膨大なマイクロフィッシュを閲覧中、日本人による能や東洋の舞踊の参与を発見した。彼女はこの短期間に俳優や機関誌寄稿者とし

てプラトール劇場の実験劇にも関与したことから、カーン自身の仮面や人形を暗示するセルフポートレートのもつ演劇性について再検討する必要があると考えた。

2. 研究の目的

1980年代末に「再発見」されたクロード・カーン(Claude Cahun 本名Lucy Schwob, 1894-1954)は、主にそのジェンダーや主体性の攪乱というフェミニズム的・ポストモダンの視点から考察されてきた。本研究は、カーンが前衛劇に関与した1920年代に光を当てて、彼女の領域横断的な活動を「演劇性」という観点から解釈し直すことを第一の目的とする。

彼女の活動に関する本格的な研究としてはF. ルペルリエによる伝記的研究の他にモノグラフ研究や数篇の論考があり、日本でも文学的アプローチによる研究(永井敦子『クロード・カーン 鏡のなかのあなた』2010他)があるが、彼女のジェンダー的特殊性への注目が先立ち、作家・俳優・写真家・オブジェ制作者としての多面性を統一的に捉える試みはまだ十分になされていない。

とくにカーンとそのパートナーであったムーア(Marcel Moore 本名Suzanne Malherbe, 1892-1972)が1930年頃からシュルレアリスムと緊密な関係をもつ以前の1920年代(所謂「狂乱の20年代」)に前衛劇場に関与していた事実は指摘されてはいるが、その詳しい経緯はいまだ解明されていない。この時期のパリの前衛劇場では、日本人の舞踊家・音楽家やアメリカ人の舞踊家も巻き込んで、伝統的演劇を脱構築しようとする実験的試みが沸騰していた。ここで実施されていた「仮面」や「人形」という意匠を用いた様式的な身ぶりに関連させて、カーンのセルフポートレートや文学テキストに刻印された「演劇性」によるアイデンティティの重層化の先駆性を解明する。そしてここに、現代アート全般に顕著である「パフォーマンス」的要素の胚胎を確認する

のが本研究の最終目標である。

3. 研究の方法

1920年代という限られた時期におけるカーンとムーアの前衛劇・実験劇への関与の実態を解明するために、二つの前衛劇場の活動の全貌について、ミメーシスを原理とした伝統的演劇を脱構築するための一つのモデルとしての日本の能や東洋的舞踊の組み入れとともに、詳しく調査する。またカーンの写真作品、モンタージュやオブジェ作品だけでなく、著作、詩作品、雑誌や新聞への寄稿文、手稿を「演劇性」という新たな視点から分析し直すと同時に、ムーアのイラストや舞台デザイン・衣装等の埋もれた仕事を発掘した上で、それらに通底する「演出」化や「パフォーマンス」的要素について、現代アートの諸ジャンルとの関連性をも視野に入れながら考察する。

(1) 1920年代後半のパリの前衛劇場が、その先駆者たちの影響を受けながらどのような理念に基づきどのような具体的活動を行ったのか、当時のプログラムや批評記事等の原資料に基づいて調査する。

(2) 上記の前衛劇運動に参加した日本人舞踊家・音楽家の動向、及び東洋の演劇・舞踊の位置づけと、同じくそこに加わったアメリカ人舞踊家の活動について調査する。

(3) 前衛劇におけるカーン(俳優や機関誌の寄稿者として)とムーア(舞台デザイナーやイラストレーターとして)の活動とその意義について調査・考察する。

(4) 初期から晩年まで撮りつづけていたカーンとムーアの共同制作である「セルフポートレート」について時期ごとに分類し、「演劇性」という新たな視点から分析する。

(5) カーンの短編集や自伝的著作だけでなく雑誌掲載の批評記事やエッセイ等について詳細なテキスト読解・分析を行う。

その上で、カーンの多岐に亙る活動に通底

する「演劇性」の現れを明らかにし、現代アートの多様なジャンルにおけるパフォーマンス的要素の先取りとしてカーンの領域横断的な営為を位置づける。それを通してできる限り議論を芸術一般、「美的なもの」一般の問題へと開いていく。

4. 研究成果

シュルレアリストの女性写真家・作家として近年注目されているクロード・カーンの領域横断的な活動を「演劇性」及び「カーニヴァル空間」という観点から捉え直すことをめざして、以下の調査・研究を進めた。

(1) 1920年代のフランス前衛劇運動について

フランス前衛劇の系譜について、レアリスムや自然主義演劇への批判からの出発と、19世紀末から20世紀初めにかけての小劇場運動の動向を中心に、諸資料により調査した。

パリの演劇界では19世紀後半に起こった自然主義文学/自然主義演劇に対抗して、象徴主義演劇にはじまる活発な動きが高まっていた。フランス不条理演劇の出発点となった『ユビュ王』(1896)の作家ジャリはカーンの叔父で象徴主義作家のマルセル・シュオップの友人であった。それを引き継ぐ詩人アポリネールの実験劇『ティレシアスの乳房 超現実主義のドラマ』(1917)のパリ上演で演出を担当したアルベール=ピロは、のちに自ら「プラトー劇場」を立ち上げ、そこにカーンらが参加することになる。ヨーロッパの近代社会・近代文化へのアンチテーゼとして社会的・政治的な意味も帯びたさまざまな前衛劇の試みは、そのインスピレーションの源泉として、例えば古代や東洋の「仮面」劇・「人形」劇を参照したが、いずれも様式化された身ぶりや舞踊を特徴とするものであった。こうしたラディカルな前衛劇運動にカーンは早くから関心をもち、1920年頃にパリに居を定めて以降は次第に関与を深めていっ

た。

大衆芸術の隆盛と並び前衛芸術運動が高まった 1920 年代、カーン達がナントからパリに移住して最初に関わった前衛劇場「エゾテリック劇場」(Théâtre ésotérique)と「プラトー劇場」(Le Plateau)について、当時のプログラムや批評記事等の原資料を中心に、フランス国立図書館(BNF)においてマイクロフィッシュの閲覧等により詳しく調査した。

1923年12月に立ち上がった「エゾテリック劇場」は、脚本家のカスタン(Paul Castan)とパートナーの女優ベルト・ディド(Berthed'Yd, 1903-1990)が主宰し、1924年初頭に「神智学協会」(la Société Théosophique)の本部のホール(le Salle Adyar)で旗揚げを行って以来、演劇と舞踊を中心とした公演を定期的で開催した。その主旨は、「エゾテリック」(秘教的)という名にふさわしい野心的且つ非常に独特なものであった。

一方、アルベール=ピロ(Pierre Albert-Birot, 1876-1967)はアポリネールに心酔して雑誌«SIC»(1916-19)を主催していたが、『ユビュ王』の強い影響や『ティレシアスの乳房』を自ら演出した経験をもとに、その後「プラトー劇場」を立ち上げて、カーンを演劇活動に引き入れることになる。写実主義/自然主義へのアンチテーゼとして、熟練の俳優によるミメシス的な演技ではなく、むしろ生きた人間を離脱したマリオネット的な表情と身体表現を求める「プラトー劇場」——その名も「舞台・座」(plateau)からくる——にとっては素人のぎごちない動きがむしろ望ましいものであり、数人のアマチュア俳優のなかには、日本人が交じることもあった。

(2) 前衛劇運動に加わった日本人舞踊家・音楽家について

上記の「エゾテリック劇場」では1929年6月18日、日本人出演者3名を中心とする歌と踊りのタベ『ガラ・オリエンタル』(Gala Oriental)

を開催しており、その詳細がフランス国立図書館(BNF)での資料調査から明らかになった。彼らはそこで「浦島」(Urashima)「猩々」(Shojo)などの舞踊詩、山田耕筰作曲の歌や童謡などを披露し、他にアメリカ人舞踊家ナジャによる東洋風のダンスも加わった。主な演目は以下の通りである。浦島、インドの歌、儀礼的舞踊、笛吹き・パーン、二つの劇的舞踊、猩々の舞踊、5つの日本の民謡風の歌、春の幻想、カンボジアの幻想、かっぱれ踊り etc. 当時の前衛劇・実験劇には、従来のレアリスム演劇を脱構築する一手法として日本の能や歌舞伎、東洋の舞踊等の様式化された身ぶりへの関心が強かったと考えられる。ここに参加した3人の日本人Toshi Komori(小森敏)、Yasoshi Wuryu(瓜生靖)、Yoshinori Matsuyama(松山芳野里)に関する資料も文献もきわめて少ないが、BNF及び早稲田大学・演劇博物館等で諸資料の調査を行った。また、小森による『浦島』劇や、瓜生が出演したフランス語版『修禅寺物語』(Le Masque)公演をはじめ、彼らの渡仏時と日本帰国後の活動についても当時の日本の同人誌『アミ・ド・パリ』他の諸資料から情報を得た。写真家中山岩太がパリ滞在時に撮影した前衛劇の舞台写真や、藤田嗣治による舞台美術についても興味深い事実が分かった。

(3) 前衛劇へのカーンとムーアの関与

1924年頃から劇作家コンスタン・ラウンズベリー(Grace Constant Lounsbey, 1876-1964)の主宰する文化サークル«Union des Amis des Arts Ésotériques»に参加し、そこで東洋文化にも触れることになったカーンは、「エゾテリック劇場」にも関与することになる。1926年4月27日にこの劇場でラウンズベリーによる戯曲『ユディト』(Judith)が上演された際に「女」(une Femme)の役で参加した。友人のアメリカ人舞踊家ナジャもそこでダンスを披露している。ナント時代からイラストレー

ターとして活動していたパートナーのムーアは、前衛劇での舞台装置・舞台衣装やポスター制作などで協力した。

「プラトー劇場」では 1929 年にムーアはこの公演で、舞台装置と衣装を担当している。において 3 つの演目でカーンは重要な役を演じた。ペローの童話をもとにした物語『青髭』(*Barbe bleue*) では、前妻たちが殺された開かずの扉の前に恐怖に立ちすくむ新妻(Elle) の役であった。『郊外』(*Banlieue*) という演目の「男」(le Monsieur) 役は以前に日本人役者が演じた役でありその舞台写真から人形的な演技が推測される。中世風の神秘劇『アダムの神秘』(*Le Mystère d'Adam*) ではカーンは、イヴを誘惑する「悪魔」(le Diable) の役を演じた。きらめく衣装とメイクによる強い眼差しは、彼女の「両性具有性」を際立たせていた。ムーアの協力によるこれらの舞台写真やセルフポートレートは、19 世紀以来の「活人画」(*Tableau vivant*) のような様相を呈している。前衛劇を特徴づける最小限の舞台装置としての単色の背景幕やライティングもまた、彼女の一連のセルフポートレートと共通するものである。

(4) カーンの「セルフポートレート」における「演劇性」

ここでは初期から晩年まで撮りつづけていたカーンとムーアの共同制作である「セルフポートレート」について時期ごとに分類して分析し、そこに見られる異性装や仮装、鏡や二重露光を用いた折り返しや逆転という戦略、「仮面」を用いた身体感覚の異化といった側面を、「演劇性」という新たな視点から考察した。その際、E.フィッシャー＝リヒテの演劇・パフォーマンス理論や J.パトラーのジェンダー理論等を参照した。そこから、彼女のセルフポートレート制作全般において、人形や仮面という憑代によって日常世界から脱する「演劇」、その演出やパフォーマンス

スの効果への強い関心が根底にあったことが見えてきた。

カーンの一連のセルフポートレートに見られる異性装や演劇性は、彼女が意識的に前衛劇運動に関与する以前から、虚構の舞台空間のような非日常的な場と装いとを演出していたことを示している。それは、「私」の安定した自己同一性を絶えず空無化し、そこから逃れ去る手法であったといえる。

(5) カーンの著述に見られる「演劇性」

クロード・カーンの代表的な著作である短編集『ヒロインたち』(*Héroïnes*, 1925)、自伝的作品『無効の告白』(*Aveux non avenues*, 1930)、小エッセイ集『賭けは始まっている』(*Paris son ouverts*, 1934-6) またとくに新聞や雑誌に掲載された批評記事やエッセイについてテキスト読解・分析を行った。

カーンは 1926 年春にナント市で発行されたある雑誌に「室内のカーニヴァル」(*Carnaval en chambre*) という短いエッセイを寄稿している。彼女はここで、昔からのナントの名物であったカーニヴァルへの幼時の思い出を語った後、そこでの仮面や変装の効果を敷衍して、日常におけるカーニヴァル性という独自の考え方に到り、「肉の仮面」と「言葉の仮面」という手立てに託した「永続的なカーニヴァル」(le Carnaval perpétuel) を宣言している。ここには、遊戯／遊離衝動による一種の祝祭性への志向を見ることができる。

さらに、主著に組み込まれたフォトモンタージュにおける全体のデザインや演出、オブジェ作品での人形の使用、そして文学的著作における現実とファンタジーの交錯や対話的要素等にも、カーンの多岐に亙る活動における「演劇性」の現われが見られることから、文字通りにもまたメタファー的にも「劇場(演劇)」という変容の装置がその生と制作活動を支えていたことを確認した。

以上を通して、これまで見過ごされてきた1920年代の前衛劇へのカーンの関与の具体相を明らかにしつつ、彼女のセルフポートレートだけでなくフォトモンタージュや文学作品に通底する基本原理として「演劇性」を指摘することで、その営為全体の統一的な意味を浮き彫りにした。またこの時期の前衛劇における日本の伝統劇・舞踊等の役割を明確化することで、カーンとムーアにおける直接・間接的なオリエンタリズムの影響を指摘することができた。そして、現代アートの多様なジャンルでパフォーマンス的要素が大きな役割を果たすようになった状況から、以上のようなカーンの実験的試みに、現代アートの美的転回の一つの淵源を見るに到った。

ナント大学のアラン助教授（視覚文化論）とは、数度に亙りシュルレアリスムとカーンの関係に関する研究及び日本でのシュルレアリスム研究について情報交換をした。平成28年度には、現在改修中のナント市美術館（2017年6月再開館予定）及び市立図書館（メディアテーク）に所蔵されているカーンの主要作品と諸資料を再調査し、各担当者と日本でのカーン展開催の可能性について話し合った。現在、2018/9年の開催をめざして準備を進めている。

20世紀初頭のフランスで女性・ユダヤ人・性的少数者という立場から、「人形」や「仮面」という意匠を用いて人間の「自己同一性」そのものを問い直そうとしたカーンの写真的／演劇的パフォーマンスは、21世紀に入り宗教的・民族的・ジェンダー的な多様性をいかに共存させていくかという問題を抱える現代社会にとって、少なからぬ示唆を与えるはずである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計3件)

長野順子「セルフポートレートと演劇性—クロード・カーンと前衛劇の交差」『美学芸術学論集』第10号、査読有、神戸大学芸術学研究室、2014、pp.6-23。

長野順子「仮面と人形：クロード・カーンのカーニヴァル空間」大阪芸術大学紀要『藝術39』、査読有、2016、pp.47-62。

長野順子「オッフエンバック《ホフマン物語》とE.T.A. ホフマン—「アントニア」の幕に焦点をあてて」大阪芸術大学大学院紀要『藝術文化研究』第21号、査読有、2017、pp.39-64。

〔学会発表〕(計3件)

長野順子“‘Les artistes japonais’ in Paris in the 1920s: A Case of Interweaving Cultures in Performance”（1920年代パリにおける‘日本人アーティストたち’—上演における文化の編み合わせの事例）「日本文化社会インスティテュート」第二回シンポジウム New steps in Japanese studies/ Part II: Modern Japanese Arts in Global Contexts、2014年12月15日、神戸大学文学部。

長野順子「仮面と人形：クロード・カーンのカーニヴァル空間」第10回関西シュルレアリスム研究会、2016年4月23日、近畿大学。

長野順子「人形の歌・人形の踊り：オッフエンバック『ホフマン物語』オランピアの幕を中心に」舞踊と音楽に関する基礎研究第3回研究会、2016年12月24日、大阪芸術大学スカイキャンパス。

6. 研究組織

(1)研究代表者

長野順子 (NAGANO, Junko)

大阪芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：20172546